

南風 こまち

お昼ご飯の時間だ。外に出る。うう、寒い。雪だ。こんな日は何かあったかいものを食べたい。そうだ、今日のお昼はラーメンにしよう。うん、そうしよう。

会社から歩いて5分。『中華そば』の赤い暖簾が雪風に吹かれてはたはたと舞っている。三角らーめん。小さいころからの僕の行きつけの店は、今日も盛況だ。

雪で凍てついた引き戸を開けると、おっちゃんとおばちゃんが元気よく挨拶を飛ばす。僕は少し会釈し、券売機へ。今日はどうしようかな。列に並びながら考える。この間給料日だったし、ちよつと奮発しよう。中盛りだ。学生の頃は中盛りがベタだったけど、さすがに今はきついな。

千円札を入れ、『しょうゆ 中盛り』のボタンを押す。ういーん、ういん。ぷしゅー、かこん。じゃらららら。券とおつりが吐き出される。

カウンター席がうまい具合に空いていた。昔はこの高い椅子に座るのが大変だったな、じいちゃんによくだっこして座らせてもらったっけ。もう一度じいちゃんと食べたかったな。コートを背もたれにかけながら少し懐かしい気持ちになる。

「はい、どうも。今日も冷えるね」

おばちゃんがお冷を持ってきてくれる。

「ええ、外回りはきついですよ」

「ご苦労様。中盛りね」

券を手に早足で厨房に消える。厨房では鍋がぐらぐらと沸き、湯気が勢いよく踊り、換気扇に吸い込まれる。

出てくるまでの間、ぼんやりと店内を見回す。I字のカウンターにテーブル席が幾つかあるだけの小さな店は、市民市場の片隅に軒を構えている。壁には何枚か有名人のサインが飾ってある。いつもこの店は盛況で、今日は

平日だからサラリーマンが多い。みんな美味しそうにズルズル。おっちゃんはそんな客たちを横目に麺に湯切りをする。鮮やか、とは言い難い薄黄色の縮れ細麺。

おばちゃんが厨房から出てきた。僕のか。あれ、違った。テーブル席に運ばれていく。祖母と孫だろうか。そいういや最近、ばあちゃんにも会えていない。今度の休みにお見舞いにでも行こうか。微笑ましいような、早くこつちにも来てほしいような。

おばちゃんが厨房に戻ると、また出てきた。今度こそ僕の番だ。

「はい、しょうゆ中盛りです」

「ああ、どうもどうも」

「ごゆっくりどうぞ」

さあ、ご対面だ。割りばしを割り、食べよう。いただきます！

ふう、ふう、ズルズルズルズル。

うん、熱い。だから美味い。

ラーメンと言うよりはやっぱり中華そばだ。あつさりしている。脂っこくないからこそ中盛りでもするすると食べられる。

箸が止まらない。やっぱりこの縮れ細麺がいいね。スープが淡泊だからこそ、こうやってよく絡むのがおいしい。麺は一度この辺でやめる。ここの中華そばは具がたくさん乗っている。なると、チャーシュー、メンマ、海苔、そしてお麩。輪切りになった白ネギも忘れない。さて、今日はどれから食べようかな。チャーシューとメンマは数があるけど、後は一枚ずつだ。でも気分次第。

海苔から行ってみよう。うん、磯の香り。魚介ベースのスープだからなおさら合う。麺の弾力と海苔のふにやふにやがいつ食べても面白い。

よし、チャーシューだ。よく締まった筋肉質なチャーシューで、硬い。歯こたえ、うん、歯こたえ。やっぱチャーシューはこうでなくっちゃ。脂ぎとぎとのチャーシューなんてここには似合わない。少しパサついた食感を、レンジで掬ったスープで流し込む。もう一枚ある。これは後に取っておこう。

また麺をすする。あれ、もう半分くらいしか残っていない。スープも少し冷めてきて、程良い頃合いだ。麺を飲み下し、さて、ここでお麩だ。お麩といってもチャーシューみたいに薄くへらべつたい。どこで作っているのかさっぱり分からない、いつ食べても得体の知れない具だ。あつさりスープをみっちりみちに吸ったお麩を一口でパクリ。口に入りきらなかったスープが一滴、口元から伝う。やっぱスープがおいしいからこのお麩も美味しいんだろうな。脂っこいラーメンでお麩が入っていたらと考えるとぞつとする。

今度はメンマだ。単体で食べてもいいけど、今日は麺と一緒に食べよう。そんな気分だ。メンマの味わいは魚介の深みとはまるつきり違う。でも、どう深いのだろう。まあいいや、美味しい。麺の食感に少し飽きてきた頃にこのコリコリ。たまらん。もう一本食べよう。

段々器の中身が寂しくなってきた。もう終わりか。後に響くと分かっていても、やっぱ大盛りにすれば良かったかな。ちよつと口の中が熱くなりすぎてきた。水だ、水。二口くらい飲むと、ほつとする。さあ、残りも食べてしまおう。

なると。最近、これが入っているラーメンをほとんど見かけなくなった。寅さんは「見ていると目が回る」と言っただけらしいけど、やっぱラーメンにはこれが欠かせない。食べてみるとごく普通のかまぼこだけど、

目を楽しませてくれる。元々が魚なこともあつてか、やっぱ魚介だしのスープとよく合う。というかこのスープ、いつ味わってもあつさり穏やかだ。魚介系の具材とか、主張がそこまで強くない具だつたら割と何にでも合うかもしれない。

そういう意味ではこのチャーシューもあまり味がしっかりしているわけじゃない。あくまでも優しい。舌に襲い掛かるような脂っこいチャーシューとは真逆だ。うん、この筋肉質の繊維。歯に挟まった。

麺とメンマをズルズル。あれ、麺がもう数えるほどしか残っていない。でもその分体がポカポカしている。やっぱ冬場はラーメンに限る。そういつて年がら年中ここでお昼を食べているけれど。

さあ、最後のお楽しみ。スープだ。あまりお行儀は良くないけれど、一息に飲み干すのが痛快だ。あつさりしているから、変な言い方だが喉越しが良い。うま味が口を駆け抜け、温かさが食道から胃に伝わり、そこから全身にじんわりと広まる。ああ、至福。これだからこのラーメンはやめられないんだよなあ。

最後に僅かに器の底に残った麺の切れ端とネギをつまむ。水を飲み干す。スープの余韻がひんやりと薄れ、消えていく。祭りが終わった時のような満足感と寂しさ。

爪楊枝で歯の手入れを済ませ、完食だ。

「馳走様でした」

「まいどー」

「お粗末様でした」。はい、これ、いつもの」

おばちゃんが厨房から出てきて、僕の手に握らせるもの。イチゴ味のキャンディーだ。小さい頃からおまけで貰っている。僕はイチゴ味がずつとお気に入り、見つ

からないと拗ねてじいちゃんを困らせたっけ。今となつては照れるばかりだけど、やっぱ断れないな。

「またおいでね」

「はい。どうも、ご馳走様でした！」

「ありがとうございます」

おっちゃんとおばちゃんの声に見送られながら、店を後にする。お腹いっぱい、もう寒くない。

さて、会社に戻るか。キャンディーの棒を口からびよこびよこさせながら、僕は雪の中を引き返す。